

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	26221106	研究期間	平成26(2014)年度 ～平成30(2018)年度
研究課題名	自然条件下における生物同調現象	研究代表者 (所属・職) <small>(平成31年3月現在)</small>	工藤 洋（京都大学・生態学研究 センター・教授）

【平成29(2017)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

植物の生育をとおしてイン・ナチュラ研究、分子フェノロジー、同調現象の概念を構築し、自然条件下の生物同調現象を明らかにしようとする研究である。生育終了の因子同定、ヒストン修飾による機能理解、バイオマーカー利用の3つの課題で進展が見られる。大規模スクリーニングによる変異体の作出や、変異体系統を確立したことは高く評価できる。また、野外播種実験において同調現象の補足に成功し、同調現象の変異体の取得に成功するなど、分析手法の開発や至近因子の解明が進み、積極的な論文等の研究成果発表や社会貢献にも努力が見られる。研究代表者と研究分担者がそれぞれ得意な分野を担当し、整合性のとれた推進となっている。以上から、研究目的を達成する可能性は高い。

【令和元(2019)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	本研究で当初に設定した、因子同定、機能理解、応答利用の3つの課題に対し、期待どおりの研究成果が得られ、応用利用においても植物ウイルス感染推定法を確立した。特に、ヒストン修飾の長期季的環境応答における機能解析では、新規性の高い研究成果を上げており、今後の研究の展開にも期待できる。